蜂と蟻

あるところにしゃ、蜂と蟻といであったわけだ。毎日仲良(い)しして、一生懸命遊んだもんだもん。それ遊んでらとき、一匹の鯛、現れたわけだ。その鯛しゃ、蜂は「オレあったてばぁ」って言うし、蟻も「あれまだオラいあった」って、喧嘩なったわけだ。なんぼしったて喧嘩せばほれぇ、あの世さ行けば閻魔(えんま)大王様、鉄の棒突いてきたわけだ。「オメがた何(な)に喧嘩してっか」って。したば、閻魔さま「オレしゃぁ、解決つけるって。白黒つける」って。これはしゃぁ、「ありがたやぁ、ありがたい」って、蟻の物になったわけだ。それで今度しゃぁ、また毎日仲良く遊んでいたわけだぁ。暮らし暮らししたば、ある日道に鰊(にしん)が落ちているのを見つけたわけだ。そいでまた喧嘩になったわけだ。そさ閻魔大王様、また来たわけだ。「まんだ、オメがた喧嘩してる。なんして喧嘩してっか」って、したわけだ。したば今度はそれ、閻魔大王様はしゃぁ、今日は忙しくて解決つけられねために、これは、「にしがはち、にしがはち」って、蜂の物になったって。とっぴんぱらり。

野村セツ(槍山　94歳)

〈解説〉

動物の拾い物分配の物語である。「ありがたい」から蟻が鯛をとり、「にしがはち」だから鰊を蜂がとるというように、閻魔大王が介在し、双方に都合の良い結果となっている。それは屁理屈で相手をごまかすというニュアンスがある。『通観』には阿仁町に伝わる類話が収録されているが、それは、「鳩と鶏と雀と蟻が小銭を拾い、鳩は八文、鶏は二文、雀は四文、蟻は残りありったけ」という話である。語呂あわせのようなところもあり、頓知や機転で笑いを誘う話である。